

學界の動き

日本財政學會第十回大會

第十回研究報告會は昭和二八年一月七、八の兩日にわたり京都大學樂友會館で開催された。參會者六十を超え、すこぶる盛會だつた。

以下兩日の報告、質疑の概要を記録したい。

第一日 共通論題(マルクス經濟學と財政學方法論)

大内兵衛教授が座長となり、宇佐美誠次郎(法政大)、武田隆夫(東京大)、大谷政敏(愛媛大)、西川清治(大阪市大)の諸教授が研究報告をおこなつた。大谷氏は、唯物辯證法と剩餘價値の觀念に批判をむけ、國家を搾取手段とみ社會保障等を單なる粉飾乃至妥協とみるマルクス經濟學の立場に反對された。西川氏は、財政學を Political Economy 或は社會科學の一分科として扱うという立場から、財政とは一部階級の利益のために存在する國家權力に物質的基礎を與へ價値の二次的再分配をおこなうもの、特に獨占資本の收奪體系の一分肢として機能するものであると規定された。宇佐美氏は、「經濟學批判」中に掲げられたプランが「資本論」のプランであつたこと、従つて「資本論」は未完の體系であつて、國家財政の問題は Political

學界の動き

Economy の體系の一部としてとりあげられるはずであつたことを明らかにし、今後財政論は、權力の問題をも含む Political Economy の一部として、體系づけられねばならぬとせられたが、この場合スミス・リカードの Political Economy が、理論であると同時に、絶対主義批判という意味における優れた政策論でもあつた點を強調し、現代の帝國主義批判のための Political Economy を體系化するにあつては、この點を注目せねばならぬ、と説かれた。これに對し武田氏は、「資本論」は資本の運動法則の基礎過程を解明する完結せる體系であると主張せられた。すなわちマルクスは基礎過程と同一平面で權力の問題をみようとしたのではない。マルクスのプランはあくまでも各時代の資本主義諸國の經濟政策批判のプランと解さるべきで、スミス、リカードの Political Economy が財政論を含むのはその體系自体が不完全だつたからである。従つてスミス、リカードの財政論の取扱ひ方をそのまま正しいものとしてうけとり得ない。今後の課題は「資本論」の理論の上に立つて財政政策を批判することにある、と主張された。

共通問題に關する質疑乃至反論は武田氏に集中された觀があつた。島恭彦教授からは次の趣旨の發言がなされた。すなわち「資本論」のいたるところで基礎過程と權力の問題ははじめからからみあつたものとして扱われているし、現代の獨占資本の最大限利潤の追求ということからいつても兩者を切離すことはできない。時子山常三郎教授から理論と政策は一貫して把握

すべき旨の發言があり、岸本誠二郎教授は、マルクスにおいて國家財政が獨立變數として扱われていないから、財政を含めて理論の一貫性が與えらるべきことを述べ、大畑文七教授は Political Economy を權力を含むものと規定するかどうかによつて研究對象が違つてくる旨の意見が出された。宇佐美氏に對しては、スマスは別としてリカードを絶対主義批判として理解するのは正しくないのではないか、リカードの價值論的租稅轉嫁論をどう理解するか(林)、などの質問があつた。

第二日 自由論題(報告者七名)

(一) 齋藤悟郎教授(新潟大)は、『地方財政論の方法論』と題し、規範性と因果性の對立を克服するために、規範的なものを因果的にみるという辯證法的思考の可能性を地方財政の諸問題に即して考察せられたが、これに對しては、新カント派的な規範・因果對立觀と辯證法的思考とは矛盾しないか、との疑問が出された。(二) 財政學會の長老神戸正雄氏は、『地方財政の自主性と道州制問題』と題し、道州制の採用が、各府縣にまたがる事業の遂行・人件費の節約等を容易にし、地方財政の中央依存をかえつて緩和することを、綿密な數字をあげて舉證せられ、會員を啓發するところが少くなかつた。(三) 宮本憲一氏(金澤大)は『内灘村の經濟構造と財政』について、實態調査にもとづき、漁業を本業、農業を副業とするこの村の經濟構造のうちに、船主の網元を頂點とし貧漁民を底とする封建性と零細性がいかに本質的な要素をなしているか、またこの構造を維

持するためにいかに財政が利用されているかをきわめて詳細に報告せられた。(四) 佐藤進氏(東京大)は、『ウォルポールの消費稅計畫について』と題し、その由來と結末を一八世紀前半のイギリスの歴史的・經濟的・階級的背景からあつげられた。anded interest と moneyed interest の關係について大川政三氏から疑問が提出された。(五) 松下周太郎教授(早大)は『財政學の諸問題』と題し、從來の國家支出決定原則、租稅根據論及び國民所得と稅負擔に關する諸見解を吟味し、特に支出決定原則について詳細な解説を加えられた。(六) 肥後和夫教授(成蹊大)は、『租稅理論における厚生經濟學的展開』と題され、U・K・ヒックスの「財政學」を新厚生經濟學の立場からする學說と規定し、その特徴として餘剩分析的轉嫁論と「semi-partial taxes・partial taxes」の租稅體系論を挙げその問題點を指摘せられた。これに對しては、山口忠夫、米原七之助の兩教授が新厚生經濟學的財政論における價值判斷視點について質問し、木下和夫教授はヒックスの轉嫁論を價格分析から離れた餘剩分析としてのみとらえることについて疑問を呈せられた。最後に(七) 青木得三教授(中央大)は、『國防費に關する古今財政學說の研究』と題され、諸學者の基本的見解を原文で舉示・朗讀し、軍備の擴張を傳染病にたとえたモンテスキューその他に多くの共鳴をよせられた。

共通テーマの關係もあつて、マルクス經濟學の方法による財政論研究が活潑に報告討論されたことは、今回の大會の特色で

あつたといえる。二十数名の大量の新入會員をむかえたことも
 今回が最初である。次回は中央大學で開催する旨決定された。

(一九五四・一・一七 林 榮夫)

經濟學史學會第八回大會

第八回大會は一九五三年十一月七・八の兩日、福島大學經濟
 學部で開かれ、第一日には總會と研究報告會があつた。座長を
 舞出長五郎幹事とする總會の、主要議題と報告決定事項は次の
 通りであつた。

- 1 學會本部において古典書繙刻の希望を會員に問いあわせた
 ところ、ペティ、ステュアートの繙刻希望が多いので、後日
 幹事會で、何れかに決定する。
- 2 去る十月十日東大で、マルクス 生誕一三五年
死没七五年 記念講演會が催
 された。
- 3 本學會の「本邦における古典の調査及び研究」は、各大學
 で着々進行中である。
- 4 新入會員十八名を満場一致で承認し、これで本學會々員は、
 合計二七四名になつた。
- 5 來年度大會は、春に横濱四大學合同、秋に關西大學で開催
 する。
- 6 日本經濟學會連合評議員の改選は、後日の幹事會に一任す
 る。

學界の動き

7 リカード全集の繙譯を學會の事業とするために、幹事會及
 び關係研究者の間で、準備委員會を構成する。

第一日の研究報告會は、次の通りであつた。

共通論題 || リカードとマルサス

(1) マルサスとリカード——思想上の前後について——

青山學
院大學 榊原 巖氏

(2) リカード「機械論」の成立と發展

長崎
大學 眞實一男氏

(3) 穀法論争期における、マルサスとリカードの書簡上の利潤
 をめぐる論争

關西學
院大學 堀 經夫氏

自由論題

(1) 國際價值論としての比較生産費説

中央
大學 川 尻 武氏

(2) アダム・スミスと「アメリカ體制」

關西學
院大學 大道安次郎氏

眞實氏は、機械論改變(原理第三版)のあとを、リカード新
 著作集による新資料からあとづけ、その改變の理由を社會的事
 情(ラディット)と先驅的學說(バートン)の影響であるとし、
 リカード學說の展開は、マカロック、ジョン・ステュアート・
 ミルなどよりラムジー及びジョンズの反リカード派の方が、
 正系であるとした。堀氏は、一八一四・九——一五・二にわた
 る收穫遞減の法則を利潤に適用する問題を中心とする往復書簡
 の中から、1短期利潤 || マルサスと長期利潤 || リカード、2需
 要説 || マルサスと需給兩面からみる *expendence* (後) *cost* ||
 リカード、という力點の置き方の相違、ならびに、この期のリ
 カードには勞働價值説がまだ現れず生産費説によつているとす